みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

ヴァヌアツ・トンゴア島民における言語使用の様相

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4574

ヴァヌアツ・トンゴア島民における言語使用の様相

白川 千尋（国立民族学博物館 先端人類科学研究部准教授）

1．はじめに

本稿では、ヴァヌアツ共和国のトンゴア（Tongoa）島民の言語使用について概略的な報告を行う。トンゴア島民にはトンゴア島だけでなく、首都のポートヴィラ（Port Vila）にも多くの居住者がいる。したがって、本稿ではトンゴアとポートヴィラの双方の人々の言語使用について述べる。また、トンゴア島民の間では複数の言語が使われているが、本稿ではとくにビスラマ（Bislama）語の使用に関する報告を基軸にしたい。本稿で行う報告は、1995年から96年にかけてのトンゴア滞在と、91年から93年、94年、2000年、01年、06年の5回にわたるポートヴィラ滞在の際に得た知見に基づく。

ヴァヌアツは、約80の島々からなる総面積12,190平方キロメートル（新潟県ほどの大きさ）の島嶼国である。もっとも新しい1999年の国勢調査によれば総人口は186,678人で、大半がメラネシア系の人々である［National Statistics Office 2000:15］。主要な宗教はキリスト教であり、人口の9割近くがその信徒である［National Statistics Office 2000:20］。基幹産業はコプラや水産物などの一次産品の輸出と観光業である。日本からの直行便はなく、日本人の観光客は少ないものの、オーストラリアやニュージーランド、ニューカレドニアからは直行便が就航しており、これらの国々などから年間5万人を超える観光客がヴァヌアツを訪れている。

ヴァヌアツは1906年から80年までイギリスとフランスの共同統治領であった。両国は島々を、ある島はイギリス、別の島はフランスといった形で分割して統治することはせず、文字通り共同で統治した。たとえばポートヴィラには英仏双方の行政府が置かれ、各島には双方の学校が併設され、双方の警官が駐留していた。こうした特異な植民地期を経た経緯もあり、1980年の独立後は英語とフランス語が公用語（official language）となっている。また、隣国のソロモン諸島やパプアニューギニアで使われているメラネシア・ピジン語に相当するビスラマ語も、公用語に加えられている。ビスラマとはポルトガル語でナマコを指すビーチ・ラ・マーに由来する。ナマコはかつてメラネシア系の人々と西洋人商人による交易の対象となっていたもので、その交易の際などに使われるようになった言語がビスラマ語であるとされる。

これら三つの公用語のほかに、ヴァヌアツには110あまりの在来語が存在するとされ［Tryon 1996:179］、「島が違えば言語も違う」とでも言えるような状況にある。総人口数を言語数で割れば分かるように、一つの在来語当たりの話者数は平均2,000人ほどと多くない。なかには話者が減ってしまい、消滅の危機に瀕しているものもあるという。

2．トンゴア島における言語使用

トンゴア島は、ポートヴィラの位置するエファテ（Efate）島から北に 80 キロメートルほど行ったところにある、面積 42 平方キロメートルの小島である。火山活動によってできたこの島には標高数百メートルの低山が連なり、南太平洋のイメージにありがちな白い砂浜などはみあたらない。1999 年の国勢調査によれば人口は 2,397 人である［National Statistics Office 2000:53］。島には 14 の集落があり、人々は主食のタロイモやヤムイモなどのイモ類を中心とする作物の焼畑耕作と、ニワトリやブタなどの飼養を組み合わせた半ば自給自足的な生活を営んでいる。

人々の間では、オーストロネシア語系のナカナマンガ（Nakanamanga）語とナマクラ（Namakura）語という二つの在来語が使われている。前者は島の北部から西部にかけて点在する八つの集落で、後者は東部から南部に位置する六つの集落で使用されている。これらの在来語は、主に家庭や集落などにおける日常生活のなかで使われている。私がトンゴアで滞在していたのは、ナマクラ語を使用する人々が暮らす人口 100 人ほどの集落であった。そこには、ナカナマンガ語が使われている集落や在来語の異なるほかの島から婚入してきた者も何人かいた。これらの人々は当初はビスラマ語を使用していたらしいが、私の滞在時にはナマクラ語を使っていた。私の知り得たかぎりでは、家庭ではほぼすべての人々がナマクラ語を使用しているようであった。

ただし、私の滞在先の集落も含めて、トンゴアでは二つの在来語だけが使われているわけではない。公用語のうち英語とフランス語は学校で使用されている。ヴァヌアツではこれら二つの公用語が学校教育の対象とされている。また、学校教育における使用言語ともなっており、国内には英語で教育を行う学校とフランス語で教育を行う学校が存在する。トンゴアには英語で教育を行う小学校が６校、フランス語で教育を行う小学校が３校あった（ほかに英語で教育を行う中高等学校が１校あったが、サイクロンによる被害を受けて私の滞在時には閉鎖されていた）。トンゴアで英語とフランス語を頻繁に使っているのは、主にこれらの小学校に通う子どもたちであることが理解できよう。

一方、もう一つの公用語のビスラマ語もトンゴアでは使われている。もっとも多く使用されるのは、ナカナマンガ語を母語とする者とナマクラ語を母語とする者が話をする際である。ナカナマンガ語が使われている集落とナマクラ語が使われている集落は、婚姻などのネットワークによって結びついており、冠婚葬祭をはじめとするさまざまな機会に人々が互いの集落を訪ね合う。そうした機会にビスラマ語は使用されている。なお、トンゴアで生まれ育った者のなかには、自分の母語とする在来語ではない別の在来語を聞く機会も多いことから、流暢に話すことはできないまでも、母語ではない方の在来語を聞き取ることができる者もいる。

トンゴアには小学校の教師や保健所（Health Centre）のスタッフ、裁判所（Island Court）の職員などとして、ほかの島の出身者が赴任している。また、ごく少数だが、日本の青年

海外協力隊員をはじめとして海外の援助機関から派遣された外国人もいる。これらの人々と話をする際にもビスラマ語が使われる。ちなみに、私の滞在先の集落の人々は外国人の私と話をする場合、ナマクラ語よりもビスラマ語を使用することが多かった。私のナマクラ語の使用力は滞在期間の後半には多少なりとも向上していたように思うが、ビスラマ語を使った方がよりスムーズにコミュニケーションがとれることから、ビスラマ語の方を選んでいたようである。

以上に述べた機会のほかに、トンゴアでビスラマ語が使われる機会として言及しておきたいのは、ラジオ番組を聞く際である。トンゴアには電気が来ておらず、電気製品を使うことはできないが、人々のなかには乾電池式のラジオなどを保有している者が少なからずいる。それらを介して聞くことのできるラジオ番組のなかで、よく聞かれているのが国営放送（Radio Vanuatu）のビスラマ語番組である。国営放送では定時ニュースが三つの公用語で読まれているが、それ以外の多くの番組はビスラマ語によるものである。

ビスラマ語の番組のなかにはメッセージ・コーナーとでもよべるものがある。ポートヴィラなどを除けば、ヴァヌアツでは電話網が十分に整備されておらず、電話の保有者も少ない（私のトンゴア滞在時には携帯電話も国内に普及していなかった）。したがって、人々は遠方の相手にメッセージを伝えたい場合、1日に数回設けられているこのコーナーを利用する。利用者から寄せられたメッセージは、アナウンサーがビスラマ語で読み上げる。こうした性格上、このコーナーはビスラマ語番組のなかでもとくによく聞かれている。

すでに述べたように、公用語のうち英語とフランス語は、学校教育の対象とされるとともに学校における使用言語ともなっている。しかし、ビスラマ語はそのどちらでもない。ただし、私の出会ったトンゴア島民はすべてビスラマ語を使うことができた。人々によれば、ビスラマ語は学校で習わなくとも、ほかの人々が話しているのを聞いたり、ラジオ番組を聞いたりすることを通じて、容易に習得できるとのことであった。

3．ポートヴィラにおける言語使用

ポートヴィラの人口は 1999 年の国勢調査によれば 29,356 人で［National Statistics Office 2000:5］、人々の多くは賃金労働に従事している。ポートヴィラは 19 世紀後半に西洋人の宣教師やプランテーション経営者などによって建設され、1906 年には英仏共同統治領の行政拠点となった。当時ポートヴィラが建設された地に集落などはなかったが、近郊には四つの集落があり、これらの集落の人々が焼畑などをつくっていたとされる。

ポートヴィラの人口は 1930 年代には約 1,000 人であった。ほとんどは西洋人やプランテーション労働者のヴェトナム人などで、メラネシア系の人々はごく少数であった。雇用されている者を除いて、メラネシア系の人々にはポートヴィラに長期間滞在することが許されていなかったためである。第二次大戦後にこの規制がなくなると、1955 年に約 200 人であったメラネシア系の人口は、67 年には 5 倍の約 1,000 人に急増した［Haberkorn

1989:10]。

ポートヴィラの人口はこの後 1979 年には約 1 万人に達するが［National Statistics Office 2000:5］、こうした経緯から窺えるように、ポートヴィラのメラネシア系の人々のほとんどは国内各地からの移住者とその子孫である。また、これらの人々の数が本格的に増えていったのがここ 50 年ほどであることを踏まえるならば、数世代にわたってポートヴィラで暮らしている人々が増えてきているとはいえ、古い人々でもおそらく 3 世代目から 4 世代目と、さほど多くの世代は経ていないものと想定することができる。

トンゴアから遠くないことや賃金労働の機会が多いことなどから、ポートヴィラには多くのトンゴア島民が住んでいる。正確な統計がないので定かではないが、トンゴア島民が数百人単位で集住する地区がいくつかあり、そのなかにはトンゴアにおける私の滞在先の集落の人々が集まって生活しているところもある。これらの地区には同じ在来語を母語とする夫婦による家庭が多く、こうした家庭ではナカナマンガ語やナマクラ語が日常的に使われている。また、そのような家庭が多いことから、在来語は地区のなかでも頻繁に使用されており、地区のなかにはトンゴアの集落に似た雰囲気が漂っている。

一方、小学校だけのトンゴアとは異なり、ポートヴィラには中高等学校や大学もあり、子どもたちや学生たちはこれらの学校で英語やフランス語を使っている。また、人々のなかには職場で両語を使用している者もいる。ポートヴィラには観光業に関連する職場、たとえばツアー会社やホテルなどで働いている者が多く、これらの人々は外国人観光客や外国人の同僚との間で英語やフランス語を使用する機会が多々ある。また、政府省庁の職員の場合も、援助機関から派遣されている外国人の同僚との間で両語を使う機会があるほか、公式文書なども英語とフランス語で作成する（この点に関しては、1991 年から 93 年までヴァヌアツ保健省で青年海外協力隊員として勤務していた際の知見による）。

ポートヴィラでは新聞が複数発行されており、テレビ番組（Television Vanuatu）も視聴できる。トンゴアでは利用できないこれらのメディアでも英語やフランス語は使われており、新聞のなかにはほとんど英語の記事だけによって構成されているものもある。また、定時ニュースを別にすれば、テレビ番組の多くは国外で制作されたもので占められており、必然的に英語やフランス語によるものが多い。人々はこれらのメディアを利用する際にも両語を使用している。

他方で、メディアでは英語とフランス語だけでなくビスラマ語も使われている。ただし、とくによく使われているのはラジオ（国営放送）においてであり、それに比べると新聞やテレビでビスラマ語を見聞する機会は少ない。新聞のなかには三つの公用語を使用しているものもある反面、読者投稿面などの限られた紙面においてしかビスラマ語を使っていないものもある。また、テレビ番組では、国内で制作された定時ニュースなどの少数の番組で使用されているにとどまる。

このように新聞やテレビ番組などではさほど使われていないようにみえるが、これらの

メディア以外の領域に目を転じるならば、ビスラマ語はポートヴィラのトンゴア島民の間でむしろきわめて頻繁に使用されていることが分かる。たとえばポートヴィラのトンゴア島民のなかには、ほかの島の出身者をはじめとして、母語とする在来語を異にする相手と家庭を築いている者が珍しくないが、こうした家庭ではビスラマ語が日常的に使われている。ちなみに、1999年の国勢調査によれば、ポートヴィラなどの都市部でビスラマ語を日常的に使用している世帯は、全世帯の58パーセントに上るという［National Statistics Office 2000:28］。また、ポートヴィラには国内各地から人々が移り住んでいるため、家庭でナカナマンガ語やナマクラ語を使っている者も、買い物のときなど、他島出身者とビスラマ語でコミュニケーションをとらねばならない機会が1日に1度や2度はある。

また、仕事に就いている者には同僚に他島出身者がいることが普通であり、同僚と話をする際にもビスラマ語が使われる。先に政府省庁の職員が公式文書の作成時に英語とフランス語を使用していることについて触れたが、これらの人々もメラネシア系ヴァヌアツ人の同僚と話をするときにはもっぱらビスラマ語を使っている。さらに、学校に通っている子どもたちや学生たちも、クラスメートに他島出身者がいることがほとんどであり、クラスメートとの会話の際にビスラマ語を使用する。

ナカナマンガ語やナマクラ語を家庭で使っている人々の場合、従事している仕事によって異なろうが、各言語の使用頻度を大雑把に整理すると、「在来語＞ビスラマ語＞英語・フランス語」という順になると思われる。これはおそらくトンゴアの居住者についても同じだろう（学校に通っている子どもたちの場合は、ポートヴィラでもトンゴアでも「在来語＞英語・フランス語＞ビスラマ語」だろうが）。しかし、トンゴアの居住者に比べると、上述の諸点からも分かるように、ポートヴィラの居住者においてはビスラマ語の使用頻度が格段に高い。加えて、ポートヴィラには、ビスラマ語の使用頻度がもっとも高いとみなし得る、家庭で日常的にビスラマ語を使っている人々も多くいる。

4．政府の言語政策

前節までの部分ではトンゴア島民の言語使用について概観したが、本節ではそれらの言語をめぐる政府の取り組みについて略述する。

まず、英語とフランス語についてだが、すでに述べてきたように両語は独立時に公用語と位置づけられた。そして、学校での教育対象言語および使用言語とされてきた。また、政府省庁では公式文書の作成などの際に使用されている。

一方、ナカナマンガ語やナマクラ語を含む在来語に関しては、消滅の危機に瀕しているとされる言語などを対象として、その保全と振興を目的としたプロジェクトが独立前の1970年代から実施されてきた。プロジェクトでは外国人の言語学者の協力のもと、辞書や文法書の作成などの活動が行われており、それらは独立後、政府機関のヴァヌアツ文化センター（Vanuatu Cultural Centre）に引き継がれている。ナカナマンガ語とナマクラ語に

関して言えば、前者については定かではないが、後者についてはこれまでのところプロジェクトの対象となっていないようである。

在来語を対象とした以上のようなプロジェクトが行われるようになったのは、独立運動によるところが大きい。1970年代初頭から活発になった独立運動のなかで指導者たちは、伝統文化を新たな国家の担い手となるメラネシア系の人々のアイデンティティの拠り所の一つと位置づけ、積極的な評価の対象とした。彼らはまた、イギリスとフランスの植民地支配の影響によって西洋文化が流入し、それにともなって国内各地の伝統文化が失われつつあるとした。そして、伝統文化を保全し、再活性化してゆくことの重要性を説いた。独立運動にともなうこうした動向との関連で在来語も伝統文化の一つと捉えられ、先述のプロジェクトが始められたわけである［白川 2005:202-205］。

在来語に関しては、幼稚園における教育を在来語で行おうとする動きがみられたことも付け加えておきたい。幼稚園でも英語やフランス語が使われているが、子どもたちが在来語をしっかりと受け継いでゆけるようにするべく、ここで述べたような試みが、1990年代に世界銀行などの支援を受けていくつかの地域で実施されたのである［Thieberger 2006:41-42］。トンゴアでもこうした動きはみられた。ただし、トンゴアのものも含めてそれらは試験的な域にとどまり、本格的には定着しなかったようである。

他方で、ビスラマ語をめぐる政府の取り組みについてはどうであろうか。ビスラマ語は独立時に公用語とされたが、憲法では国語（national language）とも位置づけられている。これは英語やフランス語とは異なる点である。しかし、公用語であり国語でもある唯一の言語であるにもかかわらず、ビスラマ語は学校教育における教育対象言語でも使用言語でもない。また、政府省庁では公式文書の作成にあたって英語やフランス語が使われることは一般的である反面、ビスラマ語が用いられることは少なく、英語やフランス語の文書が作成されないまま、ビスラマ語の文書のみが作成されることは珍しい。

英語とフランス語、あるいは在来語に比べると、政府はビスラマ語に関して積極的な取り組みを行ってきたようにはみえない。ただし、そうした取り組みがまったくみられなかったわけではない。たとえば1996年にはビスラマ語正字法委員会（Bislama Spelling Committee）が設けられ、ビスラマ語の正字法を確立するための議論が行われた。そして、その結果得られた合意に基づき、辞書や聖書などが刊行されている［Thieberger 2006:41］。

しかし、合意事項の普及活動などが積極的に行われていないせいか、委員会における合意は大きな影響力をもつものとなっていない。新聞のなかにはビスラマ語の記事が掲載されているものがあるが、表記は新聞によって、ひいては記者によって依然としてまちまちであり、公共の場でみることのできる看板や広告の表記なども同じである。また、ビスラマ語には辞書のほかに文法書なども存在するが、ビスラマ語が学校における教育の対象となっていないせいか、利用されているところを目にする機会はほとんどない。外国人による学習の際などに利用されている程度であると思われる。

５．ビスラマ語の位置づけ

政府の側にはビスラマ語に関する取り組みを積極的に実施してゆこうとする姿勢は総じて希薄だが、翻って、トンゴア島民の間ではビスラマ語はどのように捉えられているのだろうか。印象論の域を出ないが、この点について英語とフランス語、および在来語との関係において簡単に述べ、本稿を締め括りたい。

トンゴアに住む者であろうとポートヴィラに住む者であろうと、トンゴア島民の多くは英語やフランス語について、学校教育を受けるうえで重要なものと捉えているようにみえる。十分な学校教育を受けていないと、安定した収入を得ることのできる仕事に就くことは難しい。このため、ポートヴィラの居住者で、経済的に余裕のある教育熱心な親たちのなかには、英語やフランス語をしっかり身につけさせるために、子どもをネイティブ・スピーカーの教師がいる幼稚園や小学校に通わせる者もいる。

英語やフランス語と同じく、人々の間ではナカナマンガ語やナマクラ語も重要視されている。これらの在来語は、口頭伝承や伝統儀礼をはじめとして、トンゴア島民のさまざまな伝統文化を継承してゆくうえで不可欠なものと捉えられている。ナカナマンガ語やナマクラ語を理解することができてはじめて伝統文化の何たるかを理解することができる、という趣旨の発言を聞くこともしばしばである。加えて、二つの在来語自体も重要な伝統文化と認識されている。

英語とフランス語、およびナカナマンガ語とナマクラ語については、全般的にポジティヴな評価が与えられていると言える。しかし、これとは対照的にビスラマ語についてはしばしばネガティブな評価を耳にする。たとえば語彙が貧困である、複雑なことがらを的確に表現できない、ビスラマ語の語彙が入り込むことで在来語がダメになる、といったものである。これらはいずれもナカナマンガ語やナマクラ語を母語とする人々から聞いた評価であり、「ビスラマ語を母語とするトンゴア島民」によるものではない。ただし、後者からは、ここで例示したようなネガティブな評価を聞くことはなかったものの、ポジティヴな評価の方もまた耳にしたことがない。前節では、政府がビスラマ語に関する積極的な取り組みを行っていないことについて述べた。現時点でその確たる理由を指摘することはできないが、あるいは政治家や政府関係者などもビスラマ語に対してさほど積極的な見方をもっていないのかもしれない。

しかしながら、こうした評価とは裏腹に、ビスラマ語はトンゴア島民の間に広く深く浸透している。先に「ビスラマ語を母語とするトンゴア島民」という言葉を使ったが、とりわけポートヴィラの居住者のなかには、トンゴア島民としての自己認識をもちながら、ナカナマンガ語やナマクラ語ではなくビスラマ語を母語とする者が少なくない。大半は親のどちらかがトンゴア以外の島の出身者であり、ビスラマ語を日常的に使用する家庭で育った者である。

また、ポピュラー音楽のなかには歌詞がビスラマ語であるものが多い。そうした音楽を

介して、あるいは第2節で言及したさまざまな機会を通じて、ポートヴィラの居住者だけでなく、トンゴアの居住者もまたビスラマ語との接点をもちながら生活している。このように、ビスラマ語はほとんどのトンゴア島民にとって無視することのできない存在である。しかしその一方で、「貴重な文化」とか「自分たちのアイデンティティの拠り所」といった形で意味づけられることはない。そのように「可視化」されぬまま、ビスラマ語はコミュニケーションのツールとしての位置にとどまり続けているようにみえる。

【謝辞】

本稿は、2008年2月4日に神戸大学異文化研究交流センターで開催されたシンポジウム『ピジンとクレオールの世界－オセアニアとカリブの言語・文化』における本稿と同じタイトルの発表に基づくものである。発表にあたっては、日本学術振興会特別研究員の福井栄二郎氏から事前に貴重な情報をご教示いただき、参考にさせていただいた。また、シンポジウムの際には参加者の方々から多数の有益なコメントをいただいた。本稿は、それらのコメントやシンポジウムで行われた議論を十分に反映した内容になっているとは言い難い面があるが、この点については今後の課題とさせていただきたい。福井氏ならびにシンポジウム参加者の方々には、ここに記して御礼申し上げます。

【引用文献】

Haberkorn, G.

1989 *Port Vila, Transit Station or Final Stop?: Recent Development in Ni-Vanuatu Population Mobility.* Canberra: Australian National University.

National Statistics Office, Vanuatu Government

2000 *The 1999 Vanuatu National Population and Housing Census: Main Report.* Port Vila: National Statistics Office.

白川千尋

2005 『南太平洋における土地・観光・文化－伝統文化は誰のものか』 明石書店。

Thieberger, N.

2006 *A Grammar of South Efate: An Oceanic Language of Vanuatu.* Honolulu: University of Hawai'i Press.

Tryon, D.T.

1996 Dialect Chaining and the Use of Geographical Space. In J. Bonnemaison, K. Huffman, C. Kaufmann, and D. Tryon (eds.) *Arts of Vanuatu.* Bathurst: Crawford House Publishing. pp.170-181.